

あわてんぼのキューピット

遠藤寛子 作

小林和子 絵



旺文社

旺文社創作児童文学

『小学中級以上』

かつ ばび っく り 旅
 ★松竹映画「転校生」の原作
 おれがあいつであいつがおれで
 ごみすて場の原始人
 頭のよくなる体操
 飛べ！ぼくとおじいさんのツル
 コン・セブリ島の魔法使い
 ほらふき船乗り航海記
 赤ちゃんになった天才博士
 魔法のスーパークー
 とら先生と海のにじ
 南へ行つた町
 海のカスタネット
 交響曲を書いたゴキブリ
 ぼくのキツネをつかまえないで
 悪がき追い出し作戦
 しげるの無人島
 ここよりさき、野球村
 家庭教師はズッコケ魔女
 緑が丘団地の犬さうどう

木暮 正夫 文
 渡辺 有一 絵文
 山中 恒文 絵文
 長谷川 集平 絵文
 クライプ キング 訳作
 河野 一郎 訳作
 ラズムネビッチ 訳作
 田辺佐保子 訳作
 ペッシェ パイアーズ 訳作
 片岡 政昭 訳作
 別役 康司 絵文
 鈴木 康司 絵文
 ドクトル・ユーモア 絵文
 太田 大八 絵文
 フライアップ デュマ 訳作
 辻親・庄司和子 訳作
 J・B・トリイ 訳作
 舟崎 克彦 訳作
 岡本 文良 絵文
 小泉 澄夫 絵文
 河野 一郎 訳作
 クライプ キング 訳作
 小寺 倫子 絵文
 瀬野 丘太郎 絵文
 T・トッド 訳作
 中山 知子 訳作
 J・スコット 訳作
 藤本 陽子 訳作
 B・バーク 訳作
 石田 安弘 訳作
 岡本 文良 絵文
 水沢 研 絵文
 今岡 深雪 絵文
 鈴木 義治 絵文
 アリス・ロウ 訳作
 伊場 野昭子 訳作
 浜野 たくま 絵文
 鈴木 卓也 絵文

ニヤゴン船長のぼうけんシリーズ

瀬川昌男 作 小野かおる 絵

ねこまた号宇宙の旅
 ニヤンチュー宇宙大戦争
 フラックホールニヤン遊記
 『小学上級以上』

風 の む こ う に
 ママあのことないしよにしてて
 ★サンケイ児童出版文化賞大賞
 はるかなる黄金帝国
 夜の鳥
 少年ヨアキム
 X年Y国のアラビアンナイト
 シートンのかかげた灯
 ★厚生省児童福祉文化賞受賞作
 久留米がすりのうた
 風の十字路
 まぼろしの都のインカたち
 北極海の奇怪島
 あわてんぼのキュービット
 てんやわんやの金曜日

血海 達哉 絵文
 こさかしげる 絵文
 ノー・クライン 訳作
 落合 恵子 訳作
 やなぎや けいこ 絵文
 大野 隆也 絵文
 トールモー・ハウゲン 訳作
 山口 卓文 訳作
 トールモー・ハウゲン 訳作
 山口 卓文 訳作
 ドクトル・ユーモア 絵文
 太田 大八 絵文
 戸川 幸夫 絵文
 清水 勝 絵文
 岩崎 京子 絵文
 田代 三善 絵文
 安藤美紀夫 絵文
 小林 与志 絵文
 やなぎや けいこ 絵文
 大野 隆也 絵文
 ボスコイニコフ 訳作
 田辺佐保子 訳作
 遠藤 寛子 絵文
 小林 和子 絵文
 M・ロジャース 訳作
 佐藤由美子 訳作

遠藤寛子 作 小林和子 絵

も
く
じ



1	列車の中の大失敗	7
2	姉さんは美人で、妹は……	17
3	うちにはお金がないんです	26
4	あれはニセモノ	34
5	一郎さんの名アイデア	41
6	仲よし同盟が成立した	50
7	スタートはまずまず	61
8	地球人と宇宙人と確率と	70
9	おせんべい対ようかん	78

10	この人にきめた	88
11	なぞなぞみたいな会話です	97
12	どこがおかしい	105
13	こちらはうまくいきました	113
14	今度こそ成功まちがいなし	122
15	バイキングの秘密 ひみつ を話そう	137
16	おとなは何でも知っている	152
	あとがき	164
	遠藤寛子 えんどうひろこ	



装
し
絵
丁
小
林
和
子

1 列車の中の大失敗

ジリリ……。

発車のベルが鳴っている。

いそげ、いそげ、そらいそげ。

いとこの一郎さんを先頭に、テツ子、ゆり子姉さんの順に、改札口からホームめざしてかけ足だ。

ああ、苦しい。フウとテツ子は息をつく。

「一郎さん、むりしないで、次の列車にするから。」

テツ子のうしろでゆり子姉さんの声。

「だめよ、ゼツタイに乗るのよ、姉さん。」

テツ子は、もつと苦情をいいたかった。

（これに乗らないと、指定席がふいよ。せっかくわたしが早起きして買ったのに。自由席はすわれない危険があるのよ。それから……。）

しかし、テツ子が文句をいうひまもなく、一郎さんは姉さんにかけてやった。

かたつぽの手には、姉さんのポストンバッグ、あいている、もう一方の手に姉さんの手。

あつというまにテツ子を追いこした。すごい迫力。一郎さんは、Q大学のラグビー選手なのだ。

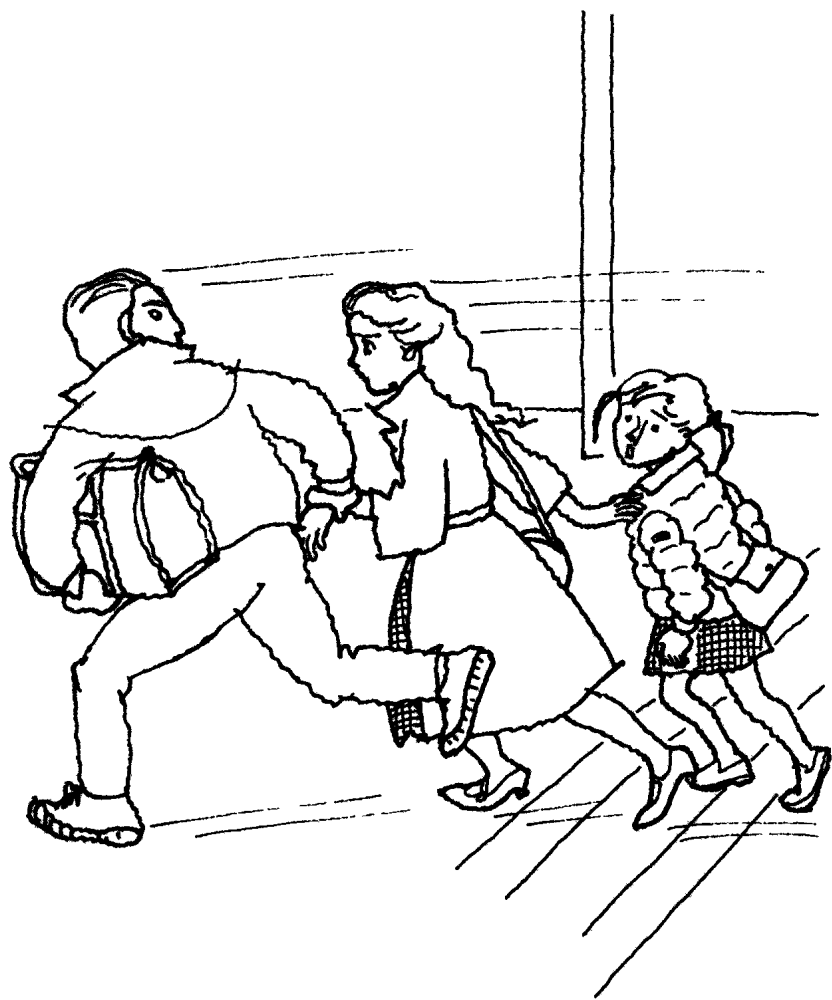
テツ子もそのあとを必死になって追いかけて、めざす列車の、一番近い乗降口に飛びこんだ。一郎さんは、バッグと姉さんの中へほうりこみ、テツ子の中へおしこんだ。

その瞬間に、ベルは鳴り終わり、ドアがすうとしまった。

ホームで一郎さんが右手をあげている——列車はすべるように動きだした。

ふーう。

テツ子と姉さんは、思わず大きなため息をついた。



「ああ、よかった。一郎さんがいなければ、とてもまにあわなかったわね。」

姉さんは、一郎さんに心からの感謝をこめた調子でいった。

「だって、乗りおくれかけたのは、一郎さんのせいだもの。あのぐらいうるの、当然よ。」

万事において、姉さんとテツ子は、こういうふうに、感じかたが正反對なのである。今度五年生になるテツ子は、高校を卒業してから家事を手伝っている姉さんと、春休みを利用して、東京のおばさんの家へ遊びに来ていた。

今日はいよいよ、東北の小さい町の、わが家へ帰る日になった。

見送りの一郎さんといっしょに、テツ子たちははやばやおばさんの家を出た。

ところが、郊外電車から上野へいく国電へ乗りかえる改札口で、一郎さんの、大学の同級生という青年に、バツタリ出会った。

一郎さんは、その、山岡さんという人に、さっそくゆり子姉さんを紹介し、（テツ子のことは、ほんのおまけみたいに）いっしょにお茶を飲むときそつたのだ。（山岡さんはすぐ承知した。）

喫茶店で、一郎さんと山岡さんは、ゆり子姉さんと、とても楽しそうに、お話をした。

三人のお話は、シュークリームじゃなくて、シュールレアリズムとか、ババロアじゃなくて、バロックとか、テツ子にわからないことばかり。そのあいだ、テツ子は名前だけ似ているシュークリームを、ぱくぱく食べるほかなかった。

それでも、三人は、時にはテツ子のことを思い出して、

「ね、ここのシュークリームおいしいだろ。東京でも有名だよ。」とか、

「ところで、テツちゃんのクラスで、今、一番人気のある歌手はだれ？」

なんて話しかけてくれたが、どうもそらぞらしい。

自分はどうもじゃまらしい、あるいは子供扱いされてると感じると、どんなにいいお菓子だって、ほんとの味はしないものだ。

「テツちゃん、ごめんなさい。姉さん、つい話に夢中になってしまったから。」

いいえ、なかなか立とうとしなかったのは一郎さんと山岡さんだったのに。

姉さんはいつもこうだ。やさしく、しとやかで、テツ子の姉さんらしくない人だ。

それでもう一つ、テツ子と姉さんと、大いにちがう点があるんだが——まあいい、これはまたあとで話そう。

それより、まず指定席をさがさなければ。

「ええつと、駅の人、席はだいぶ離れていますといったけど、案外近いわ。」

乗車券を買いにいったのはテツ子だった。

東北新幹線の通らないテツ子の町は、列車の数がとても少なく、なかなか指定席を買いにくい。今度も、二人ばらばらの席しかとれなかった。

帰りの乗車券はテツ子があずかっている。

「お金は姉さん。乗車券はテツちゃん。たいせつなものは、わけて持つての方が安全よ。」

というおばさんの忠告に従ったのである。

もつとも、おばさんも、テツ子のふだんをよく知っていたら、そんなことはいわなかっただろう——。

「2 Bが姉さん、わたしが3 Bよ。」

ところが、こんなことがあっていいのか。

たしかにテツ子の座席であるべき3のB、そこに、見も知らぬ青年が、ちゃんとすわっているのだ。

「あら、どうしたのかしら。」

姉さんは例によって、もの静かに首をかしげたが、テツ子はそんなことはしない。

「すみませんけど、ここ、わたしたちの席なんです。どいてください。」

心の中ではもつとはつきりと、

（ずうずうしい人ですね。あなた、もしかしたら無賃乗車では）といっていた。

ところが、何か横文字の本を読んでいた青年は（まあ、きざねと、テツ子はますますにくらしくなった）むすつと顔をあげて、

「どきません。ここはぼくの席です。」

丸顔の、ひげづらで、ずんぐりむっくりでぶすつとしてると、だるまさんそっくりに見えた。

だるまさんといっても、お正月のえんぎものの、かわいいのではなく、テツ子の家

の床の間に、時どき飾られるかけじくのような、本物のこわい顔のだるまさんである。なにしろ、本物は、壁に向かつて九年間とかだまってすわって修業したという、近よりにくいお坊さんなのだから。

「そんな、そんなはずありません。」

「そんなはず、あります。」

「ありませんたら、ありません。」

そのとき、姉さんがあわててたしなめた。

「テッちゃん、そんないい方、失礼よ。」

姉さんはていねいに青年にあやまると、しとやかにきいた。

「あのお、お席は何番でしょうか。わたしたち、3のBの指定券持っているのですが。」

「それはおかしいですね。ぼくも同じです。」

青年も、あまり無愛想でなくなった。

「テッちゃん、わたしたちの指定券を確かめてもらなさい。」

「あたし、ゼツタイにまちがうはずないわよ。」

といいきって、指定券をよくながめたたん、テツ子は悲鳴をあげた。

「どうしましょう。」

3 と思ったのは8だった。8の左半分のインクがうすれていて、ちよつと見ると3に見えたのだ。テツ子はよくこういう失敗をやる。つまり、そそっかしいのである。

さっきのいきおいはどこへやら、

「ごめんなさい。」

しょんぼりと、自分の本来の席へいこうとした。と、青年は、前よりもっと無愛想に、

「きみ、かわってあげる。」

というと、あみだなにあげておいた自分のスポーツバッグをさつとおろし、8のBへ、ささつといつてしまった。お札をいうひまもなかった。

シーン。

はじめ勢いよかったですだけに、よけい今度ははずかしくなった。なんだかまわりの人が、みんなテツ子を見て笑つてゐるような気がする。